

この像については、まぶたを熱くしないで語れない。とてもとてもロマンティックな美しい挿話があるので、いま長野市で静かに老を養っておられる先生のお許しを得て一度本誌にでも載せておきたいと思っている。

絵をみて帰った後、その片鱗を少し同行の二、三とガイド氏などに話したら、眼にいっぱい涙をためて、なぜそんな良い話を拝観の前にみんなにしてくれなかったかと大変責められたが――。

夜も灯下でこの世界の仏徒に知られた名作の感激を日本の知友に報ずる手紙を書き、ジャータカの楽しい物語りなどをしていた。

そのジャータカにある鹿の話がもとで、むかしから国王や富豪、貴族が鹿を放し飼いにしておいたので、あの寺の境域を鹿野苑とも呼ぶのだというが、今は奥の林の中に柵をした一廊があつて、そこで飼育しているというので昼間ちよつと寄つてみたが、いるのかいないのか一匹の姿もなく、シカとは判らないままに引き返して来た。

同行、蓮宗の御僧、シカらば明日はどうしたらシカと見られるかと訊いて出かけるシカないね――と混ぜ返してくれた。

蔓つたのようになって建ものからみつき朱色の花をつけている木が、廻廊を美しく飾っている。広い芝生の周囲には、幹が真っ白な丈の高いユーカラの木が並列し、二、三の椰子の下に、籐の卓、籐の椅子があつて、軽い飲み物をしている人もあつたりする。古いけれど欧州風のホテル・ド・パリの一日は快適であつた。

ただ一晩中、外から灯りが入って何となく眠れないので、三時から起きていた重い頭をうまい紅茶にはつきりさせて、今朝も朝食も摂らずにガンジス河畔にかけつけるのである。

全インド人の宗教ともいえるヒンズー教徒には、この街を流れるガンジス河畔は、最高の聖地で、生涯に一度はこの聖地にお詣りをし、

そして神の河ガンジスの水に浴したい、というのが彼らの強い強い願いなのである。今朝はその水浴の見学をするのである。

この数日来見てきたどの街よりも歴史の厚みを感じ、古都の感がみなぎる早朝の街を湖畔に急ぐ。広い路が左折して河畔に近くなると、サアどうしよう――かと思うほどの物乞群の大歓迎である。

奈良の鹿のように群がり、掌を出してくる人々の臭気、その周囲にのっそりと歩いている牛の横目、眼前に見えてくる大廈高樓たかたかの美しく壮大な寺院の景観とは、おおよそうらはらな路傍の屋台店、呼び売りの声、半裸はだしの信者の群れ、なにか排気ガスの中を歩いているように、一気に駆け抜けてゆきたくさなる。

この物乞の大群は、インド政府から写真を撮らないでほしい、という希望があるので、ガイド氏の請うがままにカメラは蔵して、緩い傾斜の石だたみの狭い路地を下ると、一望広闊なガンジスの流れが眼前に展開する。

河に面した広い岸は、はだしで磨りへらしたすべすべの敷石が、水浴から上がってきた人々の雫に濡れて、今にも滑りそうなのに、その左右に小さな野天店が並んで、色鮮やかな草の花などを売っている。これが神に捧げる供華であることは後で知ったが、仏教徒の供華の原型に触れるものが感じられる。

古いジャンク風な木造船に、椅子を並べて乗り込む。そして二、三人の若い男が懸命に漕ぎ、河沿いに上下して観光させてくれる。その小船も大変な数で、客は外国人が多く、ドイツの有名なカメラマンとかいう男が、望遠レンズを抱え相前後して、見物し撮影していた。

水上に出て見た沿岸上下二、三キロほど、すき間もなく立ち並んでいる塔を持つ石造寺院、インド産の赤や灰色の砂岩で四層、五層の大建築が、雑壇のように重っている。中に多少大富豪の別荘のようなものもあるとのこと。

〔仏教書道〕昭和四十一年二月七月

(おわり)